韓国の服飾変遷再考
Rethinking History of Korean Costume（Hanbok）

渡邉麻理亜

（要旨）

本稿は、韓国の民族衣装である韓服の歴史的変遷について考察するものである。韓服に関しては、柳・朴［1982］によると「500年の間大きな変遷はなかった」とされるが、実際にはその細部にいくつかの変遷がみられる。そこで本稿では、キム[2011]によって復元された韓服と、柳・朴[1982]が各時代の特徴を述べている内容を照合しながら、とくに上衣の丈、裄、袖口、脇下の長さの時代的変遷を明らかにするとともに、その変遷の理由について、服飾と女性の生活史との関連に注目しつつ予備的な考察をおこなう。

また、韓服の変遷に関するこれまでの研究では、風俗史や民族誌的な視点からの研究が不十分であり、これが韓服の変遷を過小評価してきた要因のひとつであることを指摘する。本稿は、今後のより詳細な調査研究に向けた準備作業のひとつに位置づけられる。

1章　韓国の服飾の概要

朝鮮半島の服飾の変遷を見るとき賈[2008]は「上古、三国時代、統一新羅時代、高麗時代、朝鮮時代、開港期」と時代区分ができると述べている。[賈 2008:p139]

現在、韓国の民族衣裳と呼ばれる衣服は韓服（チマ・チョゴリ）である。韓服が形成されはじめたとされるのは、15世紀のことである。15世紀は朝鮮時代に当てはまる。15世紀以前の服飾は隣国である中国の服飾[1]を着用していた。これは、高麗時代、明との朝貢関係があったからである。朝貢関係により、高麗は明の服制を導入し、自国に普及させた。これにより韓服の起源は明の服飾にあると考えられているのが一般的である。そして、官服は朝鮮国内において徐々に独自の発展をした。

図 1　明代女性の服飾[賈 2008:p155]

朝鮮王朝の前に栄えていた高麗では、明との結びつきが強く、服飾のみならず、人とともに、多くの＜モノ＞が移動していた。明において当時着用されていた衣服を確認すると、普段着は、「衫、襖、帔、背子、比甲、裙などがあり、その形は基本的に唐宋の古い制度にもとづくものであった。」とされる[華梅 2003:pp156]。このことにより明の服制を導入していた高麗も同様の普段着を人々は着用していたと考えられている。

前述のとおり賈[2008]は服飾の変遷区分を6期に分けた。これは、明の服飾を導入していた高麗と朝鮮王朝の服飾はなんらかの違いがあるためと考えられる。高麗は、朝貢関係であった明以前の王朝（宋、元）からも服飾を輸入していた。その一つを挙げるとすれば、元から輸入した簇頭里（ナックトリ）[2]である。簇頭里とは加髢（カデ）[3]と呼ばれるカツラの代用品として朝鮮王朝後期に提示された一種の冠[4]である。この簇頭里は、高麗時代において、元の風俗をそのまま受け入れる風潮があった時期があり、その時期は

宮廷内外で導入されていた。[柳・朴 1982:pp120]
また、柳・朴[1982]において、高麗の上衣について次のように述べている。

> (李徳懋の)「青荘館全書[5]」には、婦人たちの加髢辮髪する髻様と丈が短かく袖巾が狭いチョゴリは蒙古風であり、(中略) 我が国のチョゴリが今日のように丈が短くなり、コルム (紐) を付けるようになったのと、女子達に流行した加髢は蒙古風俗の影響だと云う。
>
> [柳・朴 1982 : pp120] (括弧内は筆者挿入)

という事が述べられている。しかしこの『青荘館全書』が書かれたのは、高麗時代ではなく、朝鮮王朝後期であることを断っておく必要がある。ともあれ、高麗において元(蒙古)の様式を取り入れていたのは事実である。しかし、この記述の後、柳・朴[1983]は上衣が単に短くなっただけとし、高麗時代、朝鮮王朝時代においても、<短くなった>という印象のみの判断をしている。この判断は、前述のとおり、筆者は乱暴であると考える。そのため、現在、韓服と称されている衣服が形成され始めたとされる 15 世紀以降の上衣を次の項で検証を行う。

2章　上衣の変遷の検証

朝鮮王朝が始まった 1392 年当時はまだ高麗の服飾が継承されていた。韓服は 15 世紀後期以後、15 世紀前半まで着用されていた明朝の服飾から変化を始める。ここでは、15 世紀以降の上衣をキム[2011]の図版をもとに検証していく。

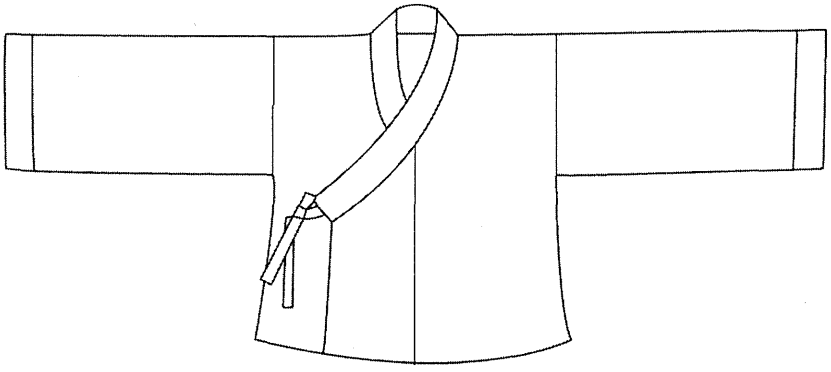

図 2　15 世紀の上衣[キム 2011:pp47]より後藤澄子氏作図

図 2 は、キム[2011]によって再現された 15 世紀の趙伴夫人の上衣である。趙伴夫人は朝鮮王朝において初めて木版画のモデルとなった女性である。この上衣の丈は 65 ㎝、裄は 52 ㎝となっている。その他の寸法は記述されていない。キム[2011]は、15 世紀の上衣に対し、次のように考察をしている。

> 저고리의 길이는 엉덩이까지 내려오며 품이 넉넉한 형태이다. 깃은 목판 형식이며 넓고 여밈이깊다. 허리에대가 아닌 가늘고짧은 고름을 하였을 것으로 추측된다.

[キム 2011:pp46]

(訳)チョゴリは臀部まで下がり、身幅は広い形態である。襟は木版のような幅が広く作られている。腰には茎のように細い紐がある。

図 3　趙伴夫人の木版画(韓国国立中央博物館所蔵)

キム[2011]は、袖口と襟に全体の服地とは色の違う布をあてがった。この部分はすでに明朝の上衣から少し変化が生まれている。明代の服飾は図のように上衣は膝元近くまで伸び、前身頃に紐をつけている様子はない。これに対し、趙伴夫人の上衣は、裾が臀部の位置へと少し短くなり、短い紐で前身頃を縛りとめている。

また、図 3 の版画から見える衣服の一つは、外出用のコートを着用していることである。このコートは、現在あまり着られていないが、宮廷や両班など富裕層の中のマナーであった。また外出をする際の服飾において、女性は顔を隠す必要があり、頭から黒巾を被るか、チャンオッと呼ばれる顔のみを出す様相をする必要がある。

では、15 世紀の上衣の特徴を纏めていく。一つ目は、裾が長いことである。そして袖も広い。また、コルム（紐）も細く、上衣を留めるという機能のみを果たしているようにも見受けられる。

同時期のもので柳・朴[1982]は 1560 年代の寿衣[6]を考察した際、次のように説明している。

図 4　明朝の服飾[周 1984:pp430]

1　丈が長く、よって前が下に開かれ、現在のテゥルマキ(durmaki 두루마기：周衣)と添うように両側がふさがっている。
2 袖は筒袖であり、袖丈は甚だ長く、袖下の線が直線になっていて、袖口には幅広い布即ちクットン(keutdong 끝동)がついていた。
3 衿は表と裏が皆、今の裏襟の形と同じになっていて、きわだって見えた。
4 従って衽の形も裏衽のようについていて、衽の下が上に比べ広く、多く合わせるようになっている。
5 トリョン(toryeon 도련：裾端)はまるで唐衣のように曲線が甚だ円くなっている。

[柳・朴 1982:pp291]

と述べている。しかし裾の長さについては何も述べられていない。図 4 において明代の服飾を再掲したが、明代の上衣が膝丈であったことが伺える。このほかにも各時代の大まかな特徴は述べられるものの、変遷としてはとらえられていない。

では 16 世紀に入るとこの上衣にどのような変化が起こるのだろうか。

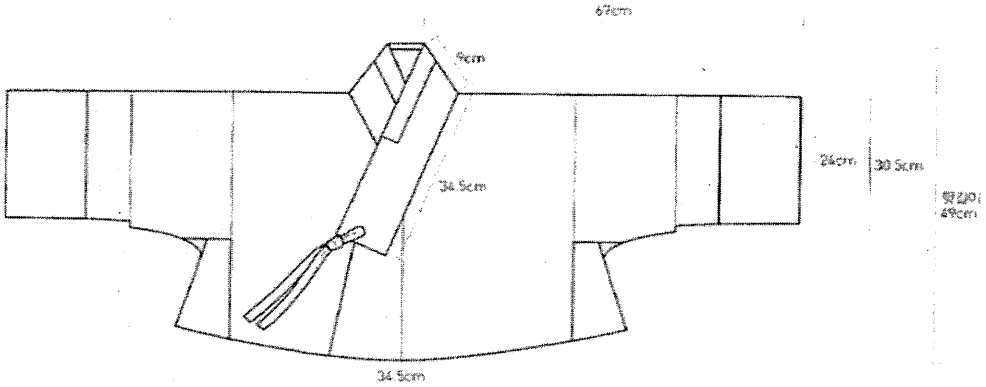

図 5　16 世紀の上衣[キム 2011:pp196 より転載]

16 世紀の上衣は、図 5 のように製図に寸法が事細かに表記されているものがある。丈と裄の寸法は別個表記され、丈は 40.5 cm、裄 56 cmとなる。特徴としては、15 世紀の趙伴夫人の上衣の丈が 65 cmに対し 24.5 cm減少し、図版からは袖口も幾ばかりか細くなっているように見られる。また、襟が 2 重構造になり、首と最も接触する部分に別の布(白布)があてがわれる。袖口は 15 世紀も同様であるが、脇にも別の布があてがわれる。それらの素材は、ほかの部分よりも丈夫なものが使われている。キム[2011]の表現によると以下のような傾向が説明される。

> 넓은 직사각 형태의 깃을 목판형깃이라고 부르는데 기데가 흐를수록 깃의 놓인 위치가 섶의 끝 부분에서 점차 안쪽으로 들어가아는 경향는 보인다.그끝에 가늘고 짧은 고름이 달려 있다.
>
> [キム 2011 : pp50]
>
> (訳)広い長方形の形態の襟を木版型の襟というが、時代が進めば進むほど襟の付け位置がチョゴリの衽から次第に奥の方に入る傾向がある。また、その両端には短い紐がついている。

また、以上の事象だけでなく、15 世紀では裾のラインが一直線であったものが、緩やかな弧を描くようになっている。これについて同時期の上衣を柳・朴[1982]は次のように箇条書きで説明している。

> 1 背丈が長く腰下目で下がる程度である
> 2 袖丈は手を覆う程長く、袖下が直線になっていて幅広い直筒袖である。
> 3 衿は現在のチョゴリの 2 倍くらい、衽は 5 倍くらい広く、衿の形は角ばっている。
> 4 コルム(結紐)は表と裏にあって、細く短く長さが同様である。
>
> [柳・朴 1982:pp292]

柳・朴[1982]が使用した資料には襟に白い布がつけられていない。袖の長さの情報は柳・朴[1982]による表現と裄の長さが手を覆う程度となっている。キム[2011]の寸法を確認すると裄は 56 cmとなる少しの差はあるが、手首を隠す程度の長さであると考えられる。

そして、当て布として袖口や襟に別の布がつけられると前述したが、この布は、汚れたら取り換えることができる。やぶれやしつこい汚れがある際、取り換えてまた新しい白い布をあてがう。この行動は、一つの韓服を長く着用するための延命措置でもある。このように当て布を縫いつけることは、16 世紀以後近代まで生活上着用されていた伝統韓服において常に存在していた。そのため、17 世紀以降の上衣においても別の布があてがわれる。

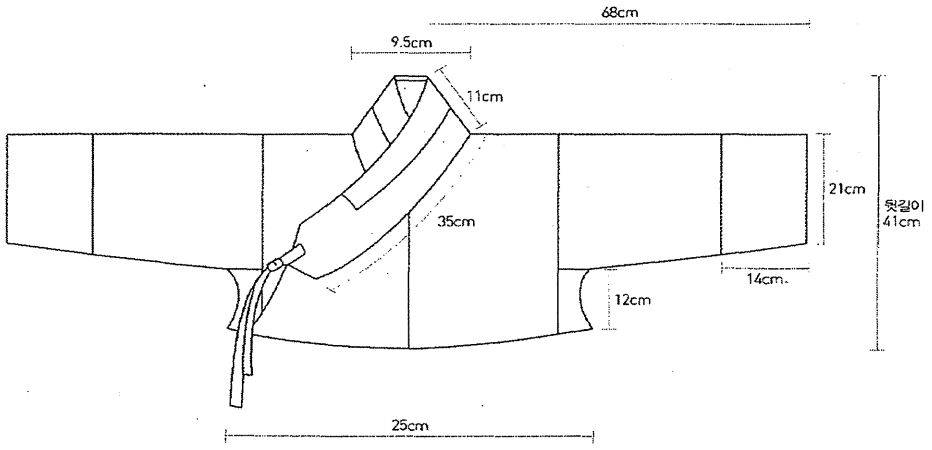

図 6　17 世紀の上衣[キム 2011:pp198]

17 世紀の上衣について、キム[2011]による説明を確認する。

> 깃, 끝동, 곁마기를 다른 색으로 장식한 삼회장저고리이다. 깃머리가동고랗게 잘려 나간 것을 당코깃이라고 하는데 초기 형태이므로 깃궁둥이는 직사각형의 목판형이다. 깃머리가 당코형으로 깃나비가 좁다. 따라서 동정의 폭도 좁다. 배래선이 곡선형으로 독특하며 곁마기가좁은 것이 특징이다.
>
> [キム 2011 : pp92. 94]
>
> (訳)衿、袖口、脇付に色違いの布を飾った三回装チョゴリという。襟の切れ端は丸くなっているが、形状としては木版型となる。また、襟幅が狭くなっている。襟の上には白い布きれのトンジョンを付けるが、それも幅は狭い。

17 世紀の上衣も 16 世紀同様に襟と袖口に別の布があてがわれている。当て布は、袖口、襟だけにとどまらず、脇にも発生する。この脇の当て布は、上衣の色よりもさらに濃い色を付けるようになり、一般的には単なる飾り布という説明がある。特に山田[1978]の場合、次のように述べている。

> チマ、チョゴリの着装状態は全身を上から下までおおい隠して、身体の線は全く見えないようにしてしまうのであるが、チョゴリとチマの脇での重なり分は、わずか 3 cm位しかなく、女性の動作によって脇部分の素肌が一部見えることが多い。女性は、このような細かい点に

> 気を配って、デザイン上のチャームポイントとしたのではないかと思われる。そのためには、脇当布に面白い図案や、美しい配色布を考えたり、又脇当布の代わりに縫い目を補強する意味と装飾を兼ねて、チョゴリの脇縫い線上に色あでやかな小さなアップリケ状の飾りを施したものもある。
>
> [山田 1978:pp46]

このように、山田[1978]は、チャームポイントと考えるとともに、当て布をアップリケ状の飾りとしてみなしている。筆者は、この当て布は単なる飾り布ではないと考える。

そして、この17世紀での特徴は、当て布だけではない。それは、裾の長さが、より短くなることである。これは、チマに服飾美の重点を置いたことにもよる。そして、チマに美を求めるあまり、作業に支障をきたした。よって、作業上の便宜を図るために、別の紐で腰部を縛り、作業時にチマが広がらないように押さえつけることをするようになっていく。

このことに対し、柳・朴[1982]は次のように説明をしている。

> 1 背丈が短くなりつつある。これは年代が降るほどチョゴリの丈が短くなる傾向を表していると云える。
>
> 2 袖丈は初期のものと同じく依然として長いが、これは手を覆うための共通点であると云える。そして袖下の線画直線である筒袖からやゝ袖口をせばめた曲線に変わっている。
>
> 3 衿は角ばっていながらも初期のものとは異なり尖った形式になっている。
>
> 4 キョッマキ[7](gyeotmaki 겯마기:脇付)は脇下のみでなく袖の方に行きつつある。
>
> 5 衽は表と裏が同じように広かったのが漸次前衽が狭くなり、表衽に於いては下部の広さは別に変わりがないが、上部は広くて衽線の傾斜が小さくなった。
>
> 6 コルム(結紐)は現在の裏コルム位の幅で実用的になっており、コルムが衿と同じ生地になっていた。
>
> [柳・朴 1982:pp292-293]

ここでは柳・朴[1982]とキム[2011]を総括して述べると、三回装チョゴリというものが発生し、それは、襟、袖口、そして脇に飾り布ができるという事になる。そして、襟とコルムについても形状に変化が表れてくる。このことにより、コルムが単なる留め具の紐から見せるための装飾の紐へと変化を始めていることにもなる。これらが17世紀の特徴となる。そして、18世紀においては次のように変化がみられる。

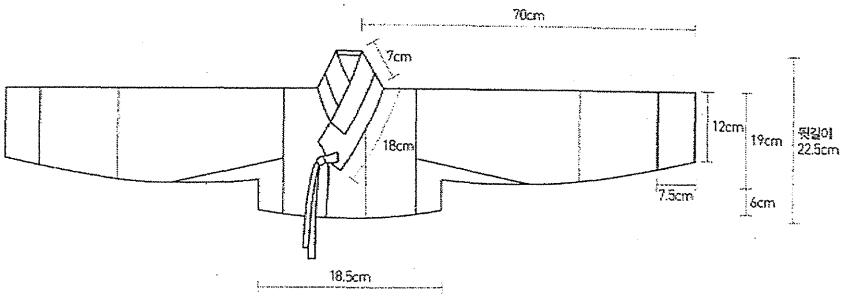

図 7　18世紀の上衣[キム 2011:pp201]

まず、柳・朴[1982]とキム[2011]の説明を確認する。

> 1 先ずチョゴリの長さが甚だ短くなっているのがわかる。前期の遺物の中、チョゴリの長さが比較的短い完山崔氏のものと比べてみても、100 余年の間にこれ程短くなったというのは大なる変容と云える。
> 2 幅も体に合うようになっているし、袖丈もかなり短くなっているが、やはり手は覆うていてこれだけは変わりがない。
> 3 衿・袖丈・袖口・襟付等が狭くなると共に、ただ脇付だけが大きくなっている。
> 4 衿は依然として角ばっており、少し尖っていた。
> 5 トンチョン(掛衿)の広さが前代よりも狭くなり、コルムの幅は前代と変わりないが、長さが長くなっていた。
>
> [柳・朴 1982:pp293]

> 영조 말년에 태어나 정조를 지나순조인 1821 년 사망한 청연 군주의 저고리를 재현한 작품으로 저고리 길이와 품이 짧고 작으며 끝동과 깃나비도 좁다.곁마기의 사선 경사가급하고 소매,배래선의 기운을 보인다.
>
> [キム 2011:pp140]
>
> (訳)英祖が晩年のころに生まれ、純祖の 1821 年に亡くなった清公主のチョゴリを再現した作品で、チョゴリの長さと幅が短くて小さく、襟端も幅が狭くなっている。脇当ては袖に向かって傾斜が急な斜線を描き、袖の形状は緩やかな弧を描いている。

18 世紀になって初めて柳・朴[1982]では裾の長さが短くなっていることの表記をする。しかしながら、17 世紀から 18 世紀にかけての 100 余年で丈が一気に短くなったわけではない。また、キム[2011]の図を確認すると、脇と肘に切り替えがつけられている。これにより、幅の細い袖であっても運動[8]がしやすくなる。脇の当て布はこの頃には一般化されたようにも見受けられる。キム[2011]において、18 世紀の中で脇に当て布を施した上衣は、18 着中 11 着となる。またも 17 世紀よりも短くなる上衣の裾も特徴である。そして、肘に当たる部分で切り替えが発生する。この切り替えは、作業上一枚布で作られる袖よりも屈折に強く、人の動きに合わせた形状へと上衣が変化を始めたことを意味する。17 世紀以前は、肩で切り替えをするとそのまま袖口まで一枚布で作成された。また、18 世紀末期の上衣について、柳・朴[1982]は次のように述べており、これは、19 世紀の衣服にも関連する内容である。

> 1 背丈がさらに短くなっている。
> 2 袖丈は清衍群主のものに比べ中年期のものよりは長いが、老年期のものよりは短い。
> 3 袖付と袖下は袖丈の場合と似ているが、袖口は狭くなっている。
> 4 衿と衽の小型化傾向が強くあらわれ、表衽に比べ内衽が一層小さくなっている。
> 5 こゝで特記すべき点は、衿の尻が角ばっていたのが丸くなっており、コルムが大きくなりつゝある事実である。
>
> [柳・朴 1982:pp295]

これら5つの特徴を確認したうえで19世紀以降の上衣を確認していく。

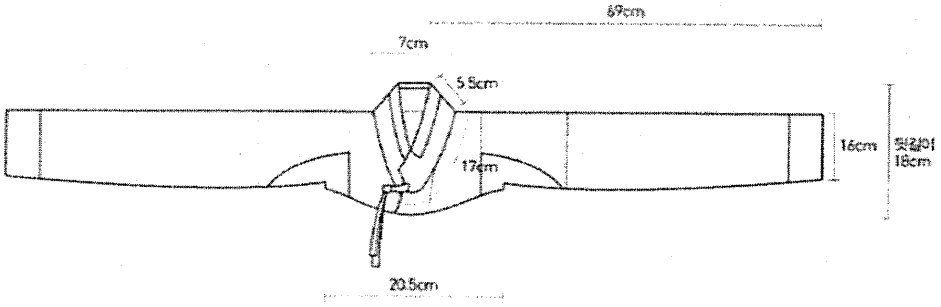

図 8　19世紀の上衣[キム 2011:pp201]

19世紀に入ると、現在韓服と呼ばれているものとほぼ同じものが出来上がるといって過言ではない。丈は、19㎝、裄は71.5㎝となる。

キム[2011]は次のように19世紀の上衣を説明している。

> 전통적인 저고리는 매번 세탁할 때마다 뜯어서 빨고 손질한 다시 옷을짓는 것이 일반적인 방법인데 누비저고리는 뜯어 빨지 않아도 되어 실용적이었다.그러나 실용적인데 그치지 않고 누비의 가늘기와 솜의 두께에 따라 다양한 장식 효과를 가져왔다.
>
> [キム 2011：pp148]
>
> (訳)伝統的なチョゴリは、洗濯をするたびに縫製をはずし洗い、また縫製をしていた。このチョゴリは、厚手のため、洗濯のたびに縫製を外すことはなく、とても実用的なものであった。しかし、厚手のために作成をするときは、キルティングのように細かく縫込み綿がずれないようにするため、いずれにせよ面倒なものではある。

この韓服は冬用のため、上衣全体に綿がしきつめられ、その上をキルティングのように縫いこまれたものである。しかしこの冬服ですら上衣の肩から裾までの丈が非常に短い。15世紀からの丈の変遷を確認しても、次にあげる授乳韓服に近づく短さである。この18センチというのは、女性のほぼトップバストと同じぐらいの位置にあり、チマが胸部まで上がっていることが伺える。そして、胸部に係る部分のチマには、刺繍が施されたものもある。ただし、刺繍の施されたチマは、たいへん高価であった。そのため着用ができたのは、宮廷もしくは、両班[9]、妓生[10]などだけであり、それ以外の人は、白いさらしを巻いていた。このことを受けて、次のような上衣が発生する。

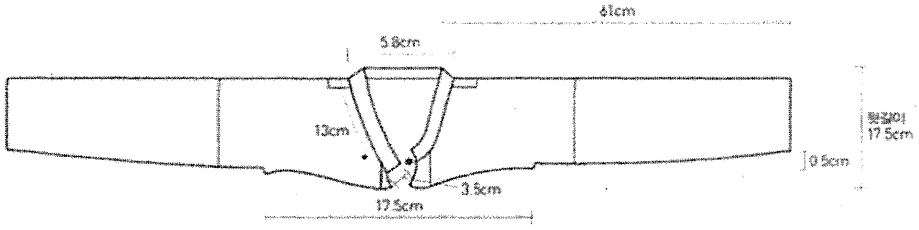

図 9　授乳用韓服[キム 2011:pp202]

この上衣は、19 世紀と同じ時期のものである。この上衣は脇下から裾までが 0.5 センチ程度と短く、袖を一直線に連結させたような形状をしている。そのため上衣の丈が非常に短く、必然的に乳房があらわとなる。図 10 は Isabella[11][1898]が乳房をあらわにした韓服を着た女性をスケッチしたものである。このスケッチよりも前に描かれた風俗画にも同様の乳房をあらわにした韓服がある。金貞我[2005a]、[2005b]は絵画に描かれた乳房をあらわにした韓服を着ている女性をもとに、「胸をさらす女性」として朝鮮王朝時代の女性像を述べている。

金貞我[2005a)によると、

> 「朝鮮時代の女性における人生の最大の目標は男児を産むことであり、男児を出産した女性は女としての使命を果たしたことになる。出産後の豊満な胸は授乳する子供がいるとの証明であり、男児を産んだ女性は堂々と胸をさらけ出し、街を闊歩できる。胸をさらす女性は、家計を支える将来の大黒柱、男児を生産した、立派な女性の表象である。」

図 10　授乳用韓服の女性
[Isabella 1898:pp135]

[金 2005：p10-11]下線は筆者による

と述べている。

この「胸をさらけ出し、街を闊歩できる」韓服は、子供を産んだ女性の象徴である。そして、子供を産んだ女性のみが着用可能ということは、乳房をあらわにすることにより、乳飲み子はいつでも欲しいときに授乳ができる授乳向けの韓服なのではないだろうか。よって、筆者はこの韓服について授乳用韓服[12]と呼ぶ。

現在、授乳用韓服は見ることができない。しかし、朝鮮戦争が起きていた頃に在韓米国軍人らが撮影した写真には、授乳用韓服と考えられる短い韓服を着た女性が被写体となっているものが多く残る。また、国立中央博物館内に所蔵されている絵画にも授乳用韓服の女性と乳幼児が描かれているもの[13]がある。これらを見る限り、19 世紀前後にはこのような丈の短い韓服が構築され、民衆服の一つとして一定の地位を持っていたと考えられる。そして、20 世紀中期までこのような丈の短い上衣がその他の民衆服と平行線をたどり残存し続けたことは、とても興味深い。

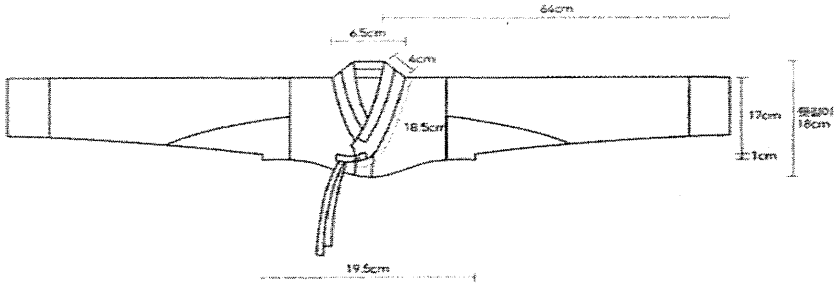

図 2　20 世紀の上衣[キム 2011:pp203]

20 世紀の上衣は、形状こそ 18・19 世紀の上衣に似ているものの、やはり授乳韓服のごとく上衣は短く、袖口もさらに狭くなる。これは、生活をする上で広い袖口よりも狭い袖口が好まれたことによる。そして、肘の部分には切り替えがなくなるも、脇の当て布が大きくなり、この頃になると、山田[1978]が述べている装飾性も浮き出てくる。キムはこの図版の上衣の説明を次のようにしている。

> 모시로 만든 삼회장저고리이다. 곁마기가 저고리에 비하여 커지고 사선도 곡선에 가깝게 변화하였다. 저고리 옆 길이에 비하여 앞길이가 상당히 긴모양인데 저고리 도련의 곡선을 앞섶쪽에서 약간불룩해 보이게 하는 것이당시 유행이았다.
>
> [キム 2011:pp182]
>
> (訳) 麻でつくられた三回装チョゴリである。脇当てがチョゴリ全体遺体して大きくなり、袖に向けて作られる斜線も曲線を描いている。チョゴリの横の長さに比べて丈が短く、脇から下着をちらりと見せるのが当時の流行であった。

キム[2011]の説明によると、脇から見える下着を見せることが流行となっている。これは、妓女らが当時のファッションリーダーであったためであると考えられる。彼女らは、いわばホステスであり露出の高い韓服を着用して仕事をしていた。彼女らの服飾は、色艶やかなものが多く、民衆のあこがれのような存在でもあった[14]。そのため、脇当てに対して装飾性を高め、流行を作り出したと考察をする場合、山田[1978]の表現は当てはまる。

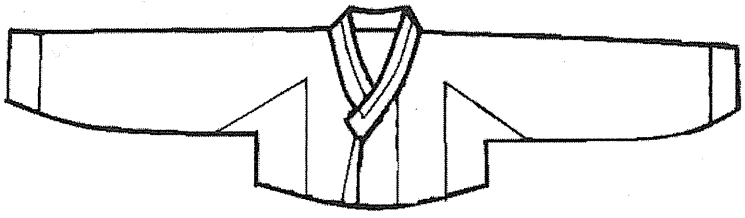

図 12　現在の上衣[筆者作図]

図 12 の韓服は筆者が 2011 年秋に購入した改良韓服である。また、この改良韓服は、上衣のみを見

る場合、伝統韓服との差異は着崩れ防止のスナップの有無ぐらいである。近年の韓服は、このような改良韓服が多い。その理由は、着付けをより簡単にしたということである。着付けは日本のように複雑ではなく、一人で着付けが可能であるものの、やはり、素早く行うことは難しく、着る手順も決まっている。そのため、改良韓服を図のように伝統韓服においても適用し人々により定着したことになる。

この改良韓服は1920年代に「新女性」[15]と呼ばれる女性たちにより改良されたものである。現在は改良韓服という言葉の中に2つのものが含まれている。それが伝統韓服の「改良韓服」と生活に密着した「生活韓服」である。これら2つの住み分け基準は明確ではないものの、韓国人自身は言葉を使用する際区別をしている。[16]

表 1丈と裄に対する変遷

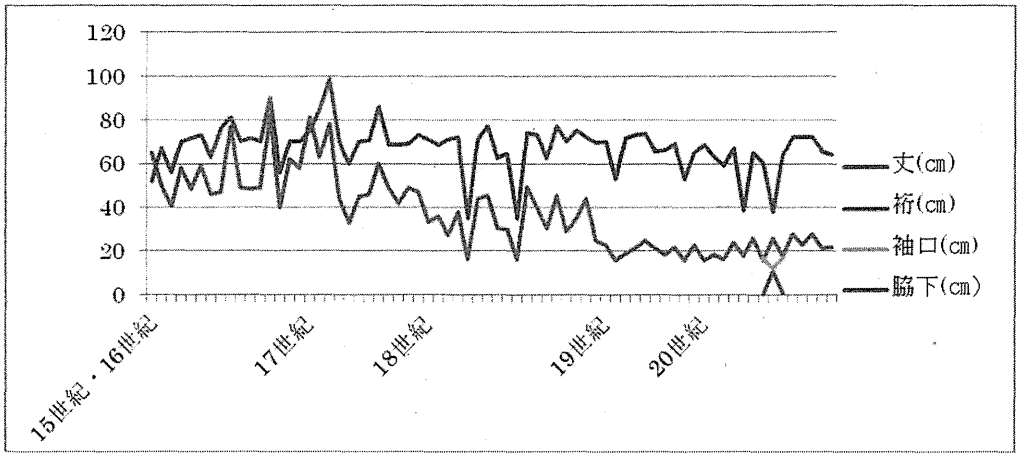

表1において15世紀から20世紀までの上衣の丈、裄、袖口、脇下の長さなどの推移をグラフ化させた。すると、丈とともに、脇下の長さが右下がりになり、裄は右肩上がりの緩やかな弧を描く。＜裄は少しずつ広くなる代わりに、丈が短くなる。＞という事が明らかになる。このような変化をディテールとしてとらえることは難しい。そして、柳・朴[1982]やキム[2011]においてあげられた特徴にはいくつかの共通点を認めるも、論考がまだ浅い部分が多く見受けられる。

3章　考察と今後の課題

本稿では、柳・朴[1982]が朝鮮王朝時代に韓服について変遷がないと扱われてきたことに対して事実の再確認を行った。現時点では、キム[2011]の資料を確認する限り、変遷がないとは言えず、また、妓女が流行の発信源として丈の短い上衣を作り上げたことなどが考えられる。しかしながら、妓女ら以上に短い韓服がIsabella[1898]の挿絵に描かれている。このもっとも短い韓服は、現存していないものの、韓国釜山にこの韓服を着た女性と乳児の銅像が立っているという情報を入手した。金[2005]において述べられた条件に当てはまっていることがわかる。

本稿では、特に丈の長さの現象について着目したが、柳・朴[1982]やキム[2011]の述べるよう襟についても変化が続いている。もともとは木版型と呼ばれるまっすぐな襟であったが、それが時を追うごとに徐々に曲線を得る。そして、曲線を得るのは襟だけでなく、袖も同様の事例が発生する。これらについて、筆者は、作業をする上で便宜を図ったものになるのではないだろうかと推測している。

女性は、上流階級もなにも関係なく外出が難しかった上に、アンバンと呼ばれる女性専用の部屋が家の敷地内にあり、その部屋で生活をしていたとされる。外に出る必要がないにもかかわらず、機能性の低い衣服は、家事を行う上では不合理なものとも考えられる。

今後は、本稿で事実確認したものをより深く検証し、歴史的背景や政治情勢などを加味したうえで、さらに論じていきたい。

---

1 中国の服飾とした理由は、明以外にも唐・宋・元についても服制を流用していた経緯によるものである。
2 元の宮廷において使用された冠。元の簇頭里は色が多彩で、装飾品も豪華であった。
3 加髢とは統一新羅以前より発生していた付け髪で、いわばカツラのようなものであった。朝鮮王朝に入ると奢侈の象徴として幾度となく規制された。
4 朝鮮王朝で使用した簇頭里は、元の簇頭里を改良し、奢侈の関係から黒い布に装飾品を少し飾ったものである。
5 李徳懋(1741-1793)朝鮮王朝時代の北学派の実学者　「青荘館全書」は18世紀後半に作成された。
6 수의 葬儀で遺体に着せる服。朝鮮時代の士大夫の寿衣は身分によって異なったが、死者が生前着ていた礼服と同様に仕立てられた。閏月のうちの吉日を選び、生前にあらかじめ仕立てておくこともあった。[金英淑 2008:pp259]
7 これは、柳・朴[1982]およびキム[2011]の誤植もしくは誤認である。キョッマキ(gyeotmaki 겯마기:脇付)は「脇の下を封じた服という意味」があり、上衣よりも丈、身幅ともに大きなものとされている。本来は、キョッパデ(겯바대)でなければならない。キョッパデの意味は、「単衣を仕立てるときに、最もほころびやすい脇の内側を補強するために当てる「く」の字型の布」である。[金用淑 2005:p44]
8 生活上の動作などを含む。
9 裕福な家のことで、主に官僚や士大夫の家である。
10 遊女あるいは舞妓と同等の女性。そのため身分は一番最下層であるが、宮廷就きの妓生もいる。美しく、芸達者で賢くないとなれないとも言われる。
11 Isabella Bird (1831-1904) フランス人女性探検家　18世紀末に日本をはじめとする東アジアに数回赴き、それぞれの地域の風俗などを事細かに記した。著書には『日本奥地紀行』などがある。
12 インターネット上では、「トップレス　チマ・チョゴリ」および「乳出しチマ・チョゴリ」と呼ばれ、現代の風俗上の観念において軽蔑されているように見受けられる。
13 申潤福「泣いている子供をおんぶする女性」朝鮮18世紀ごろの作品
14 しかしながら、妓女は身分が一番最下層であるため、服飾のあこがれはあったが、率先して妓女になろうとすることはあまりない。しかし、宮廷就きの妓女などもあり、一言に妓女と述べてもその種類は多彩である。
15 「新女性」とは、1920年代に日本をはじめとする海外へ留学をした女性たちが海外の影響を受け女性の社会参加などを呼びかけた人々のことを総称して「新女性」と呼ぶ。「新女性」は特に平塚らいてうをはじめとする「新婦人協会」をモデルとしていた傾向が強い
16 ただし、言葉の違いによる先行研究はないため、一概に述べることができないが、筆者が2011年11月に行った調査では使い分けをしている韓国人を多く見かけた。

（わたなべ　まりあ／名古屋大学大学院博士課程前期課程比較人文学専攻）